

第二章 鬼

1.

「……だから止めておけと言ったのだ」

「……聞いてねーぞそんな忠告」

朝九時から四時間半にわたる住職の講義を聴き終わった、伊吹、吉野、澄哉、紺の四人は、疲労困憊で尾津野家の居間に座り込んでいた。

三弥和尚の話は、寺の成り立ちから仏教と修験道の関係、こくりの市の歴史から住職の半生記に至るまで幅広く、何のためにここに来たのかを忘れてしまうほど奥深かった。紺が虚脱状態で呟く。

「で、結局鬼の話って聞いた？ ウチ後半意識が飛んでたんやけど」

「最後まで出てこなかったよ……」

泣きそうな顔の澄哉が肩を落として言った。今日の澄哉は私服姿なので、いつも以上に女の子のような雰囲気である。全体的に色合いがパステルカラーで固められていて、寺の風情と何ともミスマッチだった。ちょこんとした帽子まで被っている。

「みんなお疲れさまー。よう耐えたなー」

そこへ紅葉が祐理名さんと一緒に、よく冷えたそうめんの載ったお盆を持って入ってきた。すると途端に元気を出した紺が立ち上がり、跳ねるような大声で言った。

「いやー紅葉やーん！ 元気やったー？ 変わってへんなー」

「あはは、紺ちゃんも変わらんなー。吉野くんも」

笑って皿を配りながら、紅葉は吉野の姿を伺う。げんなりしていた吉野は急いで祐理名さんからカルピスを受け取ると、一息に飲み干した。そして、四人と紅葉は食事を始める。

「……ところでみんな、何しに来たん？」

全員がそうめんをあっさり完食し、紅葉お手製のくず餅まで食べ終わったところで、紅葉はお盆を抱えて、かわいらしく首を傾げた。

満腹になっていつも通りの爽やか野球少年に戻った吉野は、苦笑しながら話し出す。

「いや、鬼の話を開こうと思ったんだけどさ、これがもう大変で……」
「鬼って、スクナ様のこと？ 隠野山に何千年も昔からずーっとおつて、うちのご先祖様だけが会ったことがあるんやろー。すごいなー。もみじも見たいわー」

のんびりとした調子でそう語る紅葉の言葉を聞いて、全員がぼかんと口を開けた。

紺が恐る恐る尋ねる。

「も、もしかして紅葉、鬼の話めっちゃ知ってたりする？」

「うん。ひいばあちゃんにちっちゃい頃から教えてもらったから」

四人全員がその場にくずおれた。

「おい尾津野！ どういうことだ俺の四時間半を返せ」

「私は知らない！」

「ていうか最初に就職で言うたん誰や！」

「僕ですごめんなさい……」

一瞬でパニックになった四人組の前に、紅葉は困惑の表情を浮かべている。祐理名さんは、いつの間にか音もなく立ち去っていた。騒がしい部屋の中を夏らしい風が抜け、窓に下がる風鈴が涼やかな音を立てる。

「……で」

ひとしきりわめき散らして全員が落ち着くと、仕切り直して紺が口を開いた。

「その、スクナ様の話。ちゃんと紅葉、聞かせて」

紅葉は、素直に頷いた。

2.

昔から、こくりのには鬼がよーけおったんやつて。

昔って言うても、百年とか二百年やなくて、ここに人が住むずーっと前からな。山とか森とか、川があるやろ。その暗がりに、鬼とか神様とか化け物とか、とにかくそういう、何かよく分からん不思議なもんがゴソゴソ、いっぱいおったんやつて。

ほんで、そんな中で一番大きくて、一番偉かったんが、スクナ様やったん。

スクナ様はな、大きな体に、角を二本生やして、眼が四つもあって、口は耳元まで裂けとったんやって。耳も大きかったってひいばあちゃん言うてたし、イヌみたいな顔なんかなあ。布に穴開けて頭から通すような簡単な服を着て、森の中に一人、棲んどったんやって。

で、ものすごく強かったん。腕の一撃で山を削り取り、足を踏み鳴らすと湖が涸れる、ってばあちゃん言うてたけど、ホンマかな。せやけど、スクナ様はめっちゃ素直で、優しくかったんやって。

ほんで、人間がここに住むようになってからは、スクナ様が守ってくれとったん。暗がりに潜む悪い鬼が暴れたりせんよう、スクナ様が睨んどったんやな。

まー守るって言うても、スクナ様は別に人間に興味はないから、勝手に人間が、力のあるスクナ様の山の近くに住んどった、ってだけなんやけど。ホンマにスクナ様に会ったことのある人は、実は誰もおらんなん。それでも、人間はスクナ様に感謝して、お祀りするお社を建てたりしたん。それが、このお寺の一番最初の始まり。

せやけど、その、ヘイアン時代？ ぐらいになって、だんだん人間の生き方がややこしくなってくるやろ。偉い人が弱い人を使うようになったり、人と人との繋がりも増えたり、町も大きくなったり。それから、仏教が広まっていった。

そしたら、人が発する悪い「気」がこの世の中に充ちるようになって、今までにない新しい悪い鬼、強い鬼がいっぱい出てくるようになったん。

それで、村や町の中にも、鬼がうろつくようになって。スクナ様は元々、自分から人間を守ろうとしてなかったから、そんなことになっても、気にせえへんやん。新しい鬼はそれをええことに、好き勝手して、人を殺したりし始めたんやて。

そこで現れたんが、「行者様」なん。

この賀茂寺でお祀りしてる、偉い人。行者様が、うちのお寺のご先祖様に力を授けてくれたんやって。この力のおかげで、ご先祖様は悪い鬼と戦うことが出来るようになったん。それ以来、ウチでは行者様をお祀りするようになって、ウチの名字も行者様からいただいたものらしいよ。

で、うちのご先祖様は、そうやって悪い鬼を退治して封印しとったんや

けど、あるとき、どうしても倒せへん、ものすごく大きくて悪い鬼が現れたんやって。どこから出てきたんか分からん、見たこともないような恐ろしい鬼で、手当たり次第に人を捕まえては、身体を引き千切って、食べては捨てとったんやって。怖いなー。

そうするうちに、その辺の町角にバラバラになった人が落ちてるような状態になって、それと一緒に悪い「鬼」も広がって、病気で死ぬ人や、頭がおかしくなってしまう人も増えたんやって。しまいには人と人が殺し合うようにもなって、大変なことになってしもたん。

ご先祖様は一生懸命その鬼を倒そうとしたんやけど、鬼はどんどん大きく、強くなっていってから、どうしても退治することが出来やんだんやって。でも、その頃にはもう行者様は旅立たれて、こくりのにはおらんようになつとつたし、他に助けてくれる人もおらんから、どんどん死んでいく人たちを、救うことも出来やんだんやって。

どうしたらええか分からんようになって、頭を抱えたご先祖様は、最後に、隠野の山に駆けこんだん。ホンマは、そんな勝手に入ったらアカン山なんのやけどな。にっちもさっちもいかんから、スクナ様に助けてもらうしかない！ って思って、どこ行ったらええのかも分かってないんやけど、それでもどうしようもないから、山に駆け込んだんやって。

何にも考えずに森の中を走って、木にぶつかったり、洞穴に落ちたりして。それでも走り続けて、気づいたら全然どこか分からん、苔の生えた岩と草や木に囲まれた谷に、立っつとったんやって。

そこに座つとつたんが、スクナ様やったん。

スクナ様は、ご先祖様を片手で拾い上げると、のっそり立ち上がって、山から山へとまたぐようにして歩いていったんやって。人里に返したると思っただんか、人間を初めて見て面白くなっただけなんかは分からんけど、とにかく、人の住んでるところまでどんどん何にも言わずに歩いていったんて。

そんなとき、ご先祖様は恐る恐るスクナ様のお顔を見たん。怒つとるかと思っただけど、でもスクナ様は、ちっちゃい子どもみたいな楽しんでる眼をして、歩いていったんやって。

そんで、村に着いたスクナ様は、ご先祖様を下ろすと、その悪い鬼を見

つけたんやって。悪い鬼は、その頃にはもうものすごく大きく、強くなつとつて、誰にも手が付けられんようになってた。村中を壊し尽くしてた鬼は、新しい相手が現れた、つて思ったんか、迷わずスクナ様に襲いかかったんで。スクナ様も、鋭い爪と腰に差した短い刀を武器に、鬼と戦ったんやって。もちろん、人間を守るためではないんやけどな。

それからスクナ様と悪い鬼は、三日三晩ぶつ通しで戦ったん。その間に空は曇り、雷は鳴り、今にもこの世が減びるような景色が、広がったんやつて。

ほんで最後に、スクナ様が鬼の左腕を切り落としましたん。太く大きなその腕かひなを落とした途端、鬼は凄まじい叫び声を上げて、その場に倒れたんな。それから、見る見る身体が縮んでいって……最後には、ただの普通のおじさんになったんやって。

実はその最も悪い鬼は、人間が悪行を積んで、呪いを受けて、鬼になったものやったんやな。スクナ様はそれを見ると、急に興味を失ったみたいになって、くるりときびすを返して、お山の方へ帰って行ってしまったんやつて。

それからウチのご先祖様は、その残された鬼の腕をお山の社に奉って、封印したん。それ以来、めつきり悪い鬼、強い鬼の数は減って、時たま鬼女とか、人間が鬼になった化け物が出るだけになっていったんやって。ご先祖様は行者様を奉り、鬼の腕を奉り、スクナ様を奉って、それから何百年もの間、ウチがこの土地をずっと守とるんやて。

でもスクナ様はそれから、お姿を現すことはなかったんやって。

3.

「……終わり」

紅葉は少し照れた顔で、物語を終えた。

口をぽっかりと開けてその昔語りに耳を傾けていた四人だったが、最初に吉野が、興奮した口調で話し始めた。

「すっげーな……紅葉お前、ぼーっとしてただけかと思ってたけど、そんなの全部ちゃんと憶えてるんだな」

「別にすごいよー。ひいばあちゃんに聞いた話のまんまやし。ばあちゃんの方が上手」

「何言うてんの、すごいって。いやー紅葉に聞けてホンマよかったわー」
満面の笑みを浮かべて紺も頷く。

さらに、珍しく頬を紅潮させている澄哉は、こんな事を言い出した。

「ねえ……せっかくだからこれからは、『スクナ様』のを中心に調べたらどうかな」

「お、それいいな。今の話の感じだと、この土地の鬼の話って、スクナ様を中心に廻ってるみたいだったしな。俺たちも名前だけは知ってたけど、具体的にどんな内容の話なのか、あんまり分かってなかったし。そういう方向でいいよな、尾津野」

「うえ？ あ、ああ……」

違うことを考え込んでいた伊吹は、急に言葉を掛けられて戸惑った。一方で、澄哉が紅葉へ向かって更にこう尋ねる。

「ねえ、尾津野さん……」

「もみじでええよ。名前で呼んで」

「も、紅葉ちゃん。他にも、何かお話知ってるの？」

「うん。もみじ、あんまり字い読めへんから、ひい婆ちゃんによーけお話ししてもらったん。色々憶えとるよ」

そうにつこり笑って頷いた紅葉に、今度は紺が熱心にせがんだ。

「ほなもつと教えてーな」

「あーいや……そろそろ次の、民俗学の教授のところに行かねえと間に合わねえな」

すると、腕時計を見ながら吉野が呟く。

「相当な爺さんらしいから、昨日電話入れといたんだよ。また例によって話長くなるだろうし……早めに行つて、早めに帰つた方がいいんじゃないか？」

「ほんなんアンタ一人で行つたらええやん」

口を尖らせた紺が、ぶつくさ言う。それを聞いた吉野が、ハアお前何言つてんだ今さら、と声を裏返し、二人は今日何度目かの言い争いを始めた。

その隙を見て、伊吹は紅葉の耳元に近寄ると、そつと周りに聞かれない

ように話しかけた。

「……なあ紅葉。お前、今のスクナ様の話、前から知ってたのか」

「うん」

「四月に山の社に行ったときもか」

「うん」

「……」

「せやからもみじ何遍も言うたやん」

「聞いていない」

眉間に皺を寄せて伊吹は言う。いや、もしかすると本当は聞いていたかも知れない。ただあの時はまだ、こちらへ引越してきたばかりで、気持ちに余裕がなかったのだ。東京での生活スタイルを軒並み変えざるを得ず、周囲の都合が優先されて自分のやりたいことが全く出来ないため、ストレスがたまりすぎて神経症のようになっていた。そのためか、珍しく記憶が判然としない。

そう、そしてそんな募るイライラの中で、最初に確か、学校で誰か——吉野だったかも知れない——が、山に鬼を奉った妖しい社があるらしい、と嬉しそうにクラスの女子——いや、澄哉だったか——に向かって吹聴しているのを聞いたのだ。家に帰ってそれを紅葉に確かめると、紅葉はうん、あるよ、と頷いて、今のと同じ話を一通りして、

「……ああ、そういうえば聞いたかも知れない」

「せやる？ 元々もみじが、お話通りの道筋教えたんやし。せやから、ホンマに開けるの、って訊いたやん。お話では開けたらアカン、って言われとるよ、って」

そうだった。紅葉も大まじめに信じている様子でそんな話をし、おまけに祖父も祖母も叔父も叔母も従姉妹も、みんな当然のように語っているのを夕食の席で聞いて、なぜだか無性に腹が立ったのだ。そしてその晩のうちに、紅葉を引き連れ山へ向かって家を出た。

今から思えば、なんでそれぐらいのことでそんなに苛ついていたのか分からない。たぶん引越したばかりで、疲れていたのだろう。

「……ちゃんと聞いていたら、あんなに無理矢理開けなかったのに」

「今さら何言うてんの。それに、開けても何にも入ってなかったやん。も

みじめっちゃガツカリしたんやに。知らんだらよかったーって」

悲しそうに紅葉は言う。

しかし、落ち着いてこんな話を聞いてしまった以上、伊吹としても、あまりいい気はしなかった。ここまでしつかりとした歴史ある伝承があるのなら、あの社も立派な文化財ではないか。この地域の鬼に関する言い伝えの、根源に当たるのかも知れない。そんなものをろくに考えずに開けてしまったというのは、さすがに不見識に過ぎたように思う。

いや――。

もちろん、そんな問題ではない。

伊吹の目にはあの時見た、太く大きな黒い腕の様がはつきりと浮かんでいた。

あれは、今でも思い出せる。

間違いなく、左腕だった。

――伝承と同じだ。

伊吹は目を瞑ると、深く息を吐いた。

「お姉ちゃんどしたん？」

紅葉が首を傾げて、伊吹の顔を覗き込んできた。

「おーっし。それじゃそろそろ次行くか。尾津野、どした、元気だせー」
対照的にニコニコしている吉野は、伊吹の肩をとんとんと叩くと、そのまま居間から出て行った。紺、澄哉も後に続く。伊吹がその場で二の足を踏んでいると、廊下の向こうからは、彼らが祖母に挨拶する声が響いてきた。

伊吹はどうにも、気乗りしなかった。

そして――その予感、正しいものだった。

4.

「ういー着いたー。ここだ。元K大の、渡辺綱由わたなべつなゆき岐名誉教授。奥さんも先に亡くなって、今は弟子の学者だかと一緒に二人で暮らしてるんだってよ」
賀茂寺から自転車で十五分ほど行くと、田畑ばかりが広がる地域があり、

その片隅に、こぢんまりとした二階建ての日本家屋が建っていた。

こんもりと繁る暗い生け垣で囲まれた、あまりに簡素な家で、何となく構えていた伊吹からすると拍子抜けするほどだったが、隠遁した老学者がひっそりと住まうには充分だろう。四人は家の前に、自転車を停める。

電話での約束が書いてあるらしいメモを見ながら、吉野はチャイムを鳴らした。

「すいませーん。昨日お電話した吉野秀一と言いまーす。渡辺先生はいらっしゃいますかー」

そのまま応答を待つ。しかし、いつまで待っても誰も出なかった。

「おつかしーなー……何で出ないんだ？」

首を傾げる吉野をよそに、伊吹は何となく、周囲の様子を観察していた。右を向くと小さな庭があり、白い鉢植えがいくつか並んでいる。その奥には、ぼつりぼつりと冴えない色合いの木々が植えられていた。伊吹は植物学に興味がないので、どれも名前は知らない。

いかにも老夫妻が住んでいた家らしい打ち棄てられた風情の庭であり、あまり手入れをされているようには見えなかった。他の三人を残して、伊吹はその雑然とした庭の方へと歩いていく。この時刻だと家と木々と生け垣の影になって、庭は全体的に薄暗い。湿った砂を踏む自分の足音が、いやによく聞こえる。

伊吹はふと、家の角から庭の向こう側を覗き込んだ。

暗い庭の中央に、鋭い歯を剥き出しにして血走った眼を大きく見開いた人型の何かが、膝を抱えて座っていた。

「わあああ！」

腰を抜かしかけた伊吹は滅多に出したことのない声を上げ、慌ててその場から逃げ出した。いきなり悲鳴を聞いた残りの三人は、何事かと眉を顰めて伊吹の方を見た。

思わず吉野の袖にすがってしまった伊吹に向かって、吉野が言った。

「何だよ尾津野。らしくないな」

「い、いや、今そこに、何か変な……」

「何だよ」

暗い庭の方を指さす伊吹に訝しがりながら、吉野は庭の角まで行くと、その向こうをひよいと覗いてみせた。

そして、肩をすくめる。

「……何にもねえぞ」

呆れ声で吉野は言う。伊吹は恐る恐る後に続くと、吉野の肩越しに、向こうを見てみた。

——何も、いなかった。

吉野は眼を細める。

「……おい物理学者。ついにお化けの存在を認めるようになったか？」

「ふ、ふざけるな！ そんなわけないだろう……ちよつと今日は疲れているから、ただの見間違いだ。おい、さっさと行くぞ」

ニヤニヤ笑って茶化す吉野の言葉をごまかそうと、伊吹は玄関戸の前までズカズカと戻り、扉に手を掛けた。落ちかけた眼鏡を上げる。背後では紺と澄哉が、目を丸くしていた。何だか気まずい。しかし目蓋の裏には、いまだにさつき見た奇怪なモノの姿がちらちらしていた。

——どうにもさつきから、調子がおかしい。

どれもこれも、紅葉の長い語りを聞いてからである。何かこれから、よくないことが起こるんじゃないか、この先、厭な物が現れるんじゃないか。そんな茫漠とした不安が、胸の中にぼんやりと立ち籠めているのだ。

今のあの妙な錯覚も、鬼がどうのとか妙な妄念を植え付けられたせいに違いない。本当に恥ずかしい。普段文系の学者に話を聞くチャンスはなかなかないから、今日はそうした心理学的な問題についても尋ねてみようか、と伊吹は思った。

しかし——。

教授に教えを請う機会は、残念ながら訪れなかった。

伊吹が引き戸を引くと、鍵もかかっていなかった扉は、あっさりと開いた。伊吹はきよとんとしたが、田舎ならそう珍しいことでもない。特に老人の家なら、年中開け放たれていることもある。気にせず、そのまま足を

踏み入れた。

伊吹の後に続いて中に入った吉野が、奥に向かって大声を出した。「すいませーん。約束していた吉野と言いますー。先生いらっしやいますかー」

だがそれでも、何の応答もない。

仕方がないので、四人は吉野を筆頭に、家へ上がり込んだ。遠慮がちにそろりそろりと廊下を歩いて、床板は大きく軋む。吉野はまた何度か、大声で教授に呼びかけた。もしかしたらどこかで倒れてでもいるんじゃないか、と伊吹は眉間に皺を寄せた。

その時。

二階からごん、と重い音がした。

四人は天井を見上げる。

「にやあん」

ところが、二階へ向かう階段から聞こえてきたのは、愛らしい猫の鳴き声だった。安心した四人は、顔を見合わせて苦笑する。猫は日本家屋らしい薄暗くて急な階段を一段一段、身軽に降りてくる。以前から猫好きだと言っていた澄哉は階段を覗き込むと、嬉しそうに手を伸ばした。

そこで彼は、びくりと動きを止めた。

影から姿を現した猫は――全身が、血にまみれていた。

伊吹は、顔を歪める。

吉野と紺は、堰を切ったように階段を駆け上る。

そして二階の部屋のドアを、迷わず押し開けた。伊吹と澄哉も、その二人の後から急いで続く。

伊吹は紺の肩越しに、夏の日差しを差し込むその部屋の中を見た。

部屋は、書齋のようだった。いやにクーラーが強く効いている。

ドアには猫用の扉が付いていて、あの仔はどうもそこから出入りしたようだった。壁際に本棚がびっしりと並んでいて、『鬼の研究』だとか、『柳田國男全集』といった本が詰まっている。それらに囲まれている大きな書齋机の上には、今時なかなか見かけない、原稿用紙とペンが置いてあった。

その机の前、大きな書き物椅子の上に、渡辺教授らしい人物が座ってい

た。身体の前で、何かを抱えるように手を交叉させている。着ている薄い麻の服は、首から流れ落ちた大量の血で、真っ赤に染まっていた。

手の中から猫に触られて落ちたらしい、彼自身の白髪頭は、床に力なく転がっていた。

なぜかその顔には——民芸品らしい和紙で造られた、鬼のお面が被せてあった。

そんな光景をぼんやりと眺めながら、伊吹はふと、なんだかどこかで見かけたシュールレアリスムの絵みたいだな、とだけ、小さく思った。

5.

伊吹がとともに衝撃を受け止める間もなく、十分後には警察が押し寄せ、現場検証、事情聴取が始まり、流れ作業のように話が進んでいった。想像以上に大勢の警察官が、教授の小さな家にどこかどかどか入り込んできて、伊吹たち四人は、隅でただじっとしているほかなかった。

それからパトカーで市中心部の警察署に連れて行かれた四人は、順に担当の刑事から質問を受けた。とはいえ、何を聞かれたところで、生きていくときの教授に会ったこともないのだから、大して話すこともない。伊吹は怪しまれたりしないよう、出来るだけ簡単に答えた。

ろくに何も、考えてはいなかった。

解放されたのは、結局夕方六時過ぎだった。他の三人は聴取の途中や終わった後、自分で家族に連絡していたため、署の表に母親や兄弟が迎えに着ていたが、伊吹は何となく面倒くさくて、寺には電話していなかった。たぶん、教授が亡くなったということは、すでに伝わっているだろう。明日には教授の葬儀が、賀茂寺で営まれることと思う。近所の家の大半は、賀茂寺の檀家なのだ。

今隠しておいたところで、どうせそのうち第一発見者の一人が伊吹であることはバレる。そしてバレたらまた、祖父から理不尽な叱責を受けるに決まっているのだけれど、かといって正直に早めに申告したところで、そ

の説教が早まるだけのことである。

だったらもう少し先延ばしした方が、気が楽だった。とにかく、何をやるにも億劫で仕方ない。いっそのこと、このまま予定通り電車で三十分ほどの市街地にまで出向いて、本屋辺りに行ってから家に帰るか、と考える。

「……で、さ」

警察署から帰る直前、夕日の中で、ふいに吉野が言った。

「鬼について調べるのって、どうする？」

澄哉と紺が振り返る。澄哉が、少し掠れた声で応じた。

「うん……でも、止めることはないと思うよ。別に、僕らが何かいけないことをした訳じゃないし。刑事さんも言ってたじゃない。君たちは、何も気にすることないって」

「せやけど……ええんかな」

紺は眉間に皺を寄せ、うつむいている。

伊吹は少し考えてから、答えた。

「我々はたまたま巻き込まれただけだ。あの殺人鬼が狙ってくるわけでもない。やりたいのならば、やればいいだろう。事件のことは、さっさと忘れた方が……いいのではないか」

「……そう、だな。そうだよな。運が悪かったんだよ。まさか、こんなことになるなんて思わなかったな。無理にあんなところに連れて行って、ごめんな。これからは、図書館あたりで色々調べりゃいいよな。うん」

頭を掻いた吉野は、普段通りの調子を保とうとしながらそう言った。伊吹たちも頷く。

そして四人は、その場で解散することになった。それぞれ、各々の家へ向けて去っていった。

警官に教授の家から運んできてもらった自転車を押して、駅に向かう道をぼんやりと歩きながら、伊吹は携帯で電話を掛けた。

「……はい、賀茂寺です」

「ああ紅葉か。助かった。私だ。昨日も言ったように、今日は遅くなる。

夕食は外で食べる」

「あーうん。分かった。なーお姉ちゃん聞いた？　なんかまた殺された人が出たらしくて」

「知っている」

「もう聞いたん？ テレビで言うてた？ 大学の先生らしいんやけど。今度も、あの同じ犯人やって」

「ええと……また、後で話すよ」

歯切れ悪くごまかし、伊吹は電話を切った。どうしてだろうか、頭が一向に回らなかった。大してショックを受けているわけではないというのに、妙な気分だった。

駅に着くと真新しい券売機で切符を買い、ホームで電車を待った。

十五分ほどで次の電車が来て、伊吹は乗り込む。

がらがらの座席に座り、暇つぶしに手提げに入れて持ってきていたM理論についての研究書を開いたが、眺めていても一向に英語も数式も頭に入ってこなかった。電車の窓の外を、真っ暗な山の景色が流れていく。数回、葛の絡んだトンネルにも入る。

刑事の言葉が、頭の中を踊っている。

*

県警からの応援だというその眼鏡を掛けた女性刑事は、少々やつれた顔でそう言った。

「残念だけど、例の連続殺人犯の犯行に間違いはないみたい。これで四件目ね」

「鬼の面を付けるのが、犯人のやり方なのか」

伊吹はぶっきらぼうに尋ねた。刑事はすぐに、ええ、と頷く。

「毎回、首を切断してね。犯人なりの美意識があるみたいで、過去の犯行時も、遺体は毎回独特の加工が施されてる。加工って言っても、遺体にポーズを取らせたり、切断した頭部を台の上に置いたり、とか、簡単なものだけど。遺体を美術品っていうか、オブジェみたいな扱いをしたいみたいね。あの鬼のお面も、ただ被せてあるだけじゃなくて、外れないように顔に接着剤を付けて、固定してあるの。ああこれ誰にも言わないでね。秘密の暴露ってヤツだから」

「私には言っていないのか」

「あなたのこと、前にテレビのドキュメンタリーで見たことあるもの。数学の天才美少女、アメリカで英才教育を受ける、って」

「それは父が勝手にテレビ局へ売り込んだものだ。思い出したくない」

「うん、すごく不機嫌そうだったよね。まあとにかく、そういうちゃんとした人だって分かっているから、信用がおけるのよ。何か思いついたことでもあつたらぜひ教えて。で……とにかく、お友達の吉野くんの話によると、昨日の夕方六時頃に電話を掛けて、明日四人で話を聞きに行く、と伝えた、と。教授が人と会話してるのは、それが最後までいいね。一緒に住んでいる弟子の宇治川^{うじがわ}さんは、昨日から東京の学会に出ているから、あいにく留守にしていたの」

手帳を眺めながら、刑事は話を続ける。

「ただ多少不思議なのは、今までの被害者と毛色が違うところ。これまでは中学生が二人に二十代の女性が一人と、みんな若かった。しかも全員屋外で襲われていた。ところが今回だけは八十四歳のご老人で、自宅で殺されている。どうしてかしらね」

「さあ」

伊吹は素っ気なく応える。実際、何の興味もなかった。推理小説に出てくるような殺人事件の謎など、少し考えれば分かるようなものばかりで全く面白くない。自然科学の議論の方がよほど厳密で、関心が持てた。少しの間、話が途切れる。

すると話題を変えるつもりなのか、刑事はぽつりと呟いた。

「……殺人『鬼』」

「は？」

「いやあのね、ある週刊誌が今回の事件の記事に、そういう煽りを付けていたのね。隠野^{こくの}の鬼伝説になぞらえて、『鬼の郷に殺人「鬼」現る』って。わたし、前からそれが気になってたのよ。そっか、人殺しっていうのは鬼なんだなー、って」

「はあ……」

伊吹は少々呆れ気味に相づちを打った。どうもこの刑事は、相当な変わり者らしい。何やらわくわくした表情で、彼女は話を続けた。

「渡辺教授みたいな専門家が住んでいるんだったら、一度お話を聞いてみ

たかったなあ、なあんて思ってたね。そう思わない？ だって、不思議な言葉じゃない。『殺人鬼』。わたしよく人殺しと対面するけど、鬼だなんて思ったこと一度もないもの。みーんなお金に困ってとか、喧嘩で頭がカーッとなつてとか、そういうどうでもいいような、つまらない理由ばかり。そんなことで人を殺してしまつて、取調室ではしょんぼりしてるのよ。それなのに、今回の事件の犯人は『鬼』なんだから。よっぽどのことよ。一体どういう風に違ふのかな、と思つて」

どう思う、尾津野さん、と刑事は笑みを浮かべた。

*

「どう思つて……」

向井坂の駅で降り、駅ビルの中にある本屋へ向かいながら、伊吹はぼつりと呟いた。どうもこうもないだろう。ただの言い回しだ。殺人鬼以外にも、雀鬼とか鬼教師とか例はいくらでもある。要するに、単なる強調表現の一種に過ぎない。

——過ぎないはず、なのだが。

元々そういう文化的な話も聞きたくて、渡辺教授の元を訪ねたはずだったのだ。

伊吹がビルの中庭を横切ると、昼間は晴れていた空が、次第にごうごうと音を立てながら曇り始めていた。どんよりと、湿り気の多い空気が漂い出す。

この地方にしては比較的広い書店に入ると、伊吹は学術系の本の棚を見て回り、二、三冊手にとって眺めてみた。けれど、これもまた一向に内容が頭に入つてこなかった。頭の中は珍しく、ひどい混乱状態にある。理由ははっきりしないが、頭の回りに靄が立ち籠めているような感覚だった。伊吹は息を吐いた。

刑事とは、他にもこんなことも話した。

*

「何か思ったことある？ 自由に話してくれていいけど」

彼女はそう言って、話を振ってくる。伊吹は言葉を選んでから、こう答えた。

「けっこう……当たり前のように人って死んでいるのだな、と思った」

「ああ」

すると女性刑事は、またにっこりと笑った。

伊吹は話を続ける。

「当然といえば当然なのだが。いまだに、亡くなった人を発見した、という実感が湧かないのだ。普通に、知人たちと夏休みだといって遊びに出かけ、何の気もなく人に会いに行っただけなのに、その人が死んでいる。しかも惨殺されている。とんでもないものを見てしまったはずなのに……その実感が無い。衝撃が伝わってこない。まだ変わらず、普通の日常が続いているような気がする」

「そりやそうよ。人の死って日常なもの」

刑事はこくこくと頷いて言った。

「誰もBGMで盛り上げたりしてくれないし、カッコイイ照明当てたりしてくれないし。意外と、叫び声とか出ないでしょ？ 割とその辺で、人って死んでるのよ。ただ、普通の人が生活していても巡り会わないように、上手いこと社会が作られているだけ。今回と同じように、ドアを開けたらそこに遺体があった、っていうのは、市街地ではよくあることね。道端で殺されている人、山道で血を流して死んでいる人、行方不明になったと思ったら川下の河原で見つかった人、そんな人何人もいるわ。ここ何ヶ月か、この地方でも急に変死の件数が増えたから、わたしなんかすっかり慣れちゃった。山で急に行方不明になった人も大勢いるし。非日常なんて、どこにもないの」

だから、怖いよ、と彼女は少しだけ真面目な顔になった。

「ドラマとか映画みたいに、ここからここまでが事件です、はいコレで事件解決です、なんて風に区切られてたら、どれだけ楽しかったらいいと思うな。分かりやすいでしょ？ しかもああいうお話の登場人物って、殺人事件のことだけ考えてればそれで済むし。でも、実際にはいつのまにか事件が始まって、いつ終わってるんだか全然分からない。むしろ、何も終わって

ないのかも知れない。おまけに事件が起ころうが、ご飯食べて仕事して寝なきやいけない。人の死なんてそんな、日常の一コマに過ぎない。そういうものよ」

「……なるほど」

「だからこそ、気を付けてね」

刑事は真っ直ぐ伊吹に目を合わせて、こう告げる。

「そんな日常であつても、人の死つて少しずつ人の心を蝕むの。推理小説みたいに、遺体を見た瞬間に衝撃を受けて、事件が解決した瞬間に心が晴れる、そんなことは絶対はない。今、あなたは特にショックを受けてないと思つてるでしょう。みんな初めのうちはそうなのよ。でもそんなわけない。全然知らない人の死であつても、気づいたときにはあなたの身体を包み込むようにして、動けなくしていることがよくあるの。わたしも刑事になりたての頃はそうだった。だから、気を付けて。気持ちがおかしいな、とか、辛いな、とか思つたときは、遠慮なくわたしのところに連絡してね」

そして刑事は、可愛いウサギのキャラクターが印刷してある小さい名刺を渡してくれた。

ファンシーグッズのショップで買ったような、女子高生向きの柄だった。名前と電話番号とメールアドレスが書いてある。顔を上げて彼女の顔を見ると、また嬉しそうに笑っていた。

はあ、とだけ言つて、伊吹はその名刺を受け取った。

*

名刺には、「道成寺恵 道成寺恵」と印刷してあつた。けれどそのときそれを見ているから、頭がぼーっとして、何も考える気力が湧いてこなかった。思い出している今もそうだ。

伊吹は諦めて、本を棚に戻す。

——ひよっとして。

さっきからずっと頭が回らないのは、彼女の言うとおりに、自分なりに衝撃を受けているからなのかも知れないな、と初めて思った。

伊吹は何も買わずに書店を出ると、黙って駅へ向かった。

時刻はもう、八時半を過ぎていた。

6.

伊吹は電車に乗っていた。二両編成のワンマン電車である。この地方でこの時刻になると、もうこんな列車しか走っていない。客は伊吹一人だけだった。

天井の蛍光灯は、微かに明滅している。曇っているせいか、列車の外は墨で塗りつぶしたように真っ暗である。カーブを曲がる度、連結部分がギシシとうめいていた。もちろん本を読む気にもならず、くたびれた座席に深く腰掛けて、伊吹はぼんやりと、窓の向こうを眺めていた。何も見えなかった。

この地方の列車は、本当に深い森の中や海沿いの崖の上を走っていく。木々や川の流れの間を縫うようにして、レールが敷かれているのだ。車内の明かりが漏れたときだけ、時折わずかに、外の草むらだけが見える。

国鉄が通るまでは、元々、山道を人が歩いていくしかなかったような僻地である。今はもう国道も通っているが、それでも人々の主な移動手段は、相変わらずこんな小さな電車だった。カリフォルニアや東京にしか住んだことのなかった伊吹にとっては、これもずいぶん驚いたことだった。陸の孤島というのは、今でも実在するのだ。

列車はまた、トンネルに入る。

走行音が反響して、何重にも聞こえる。

そんな中、伊吹が今何となく考えていたのは、

四月、紅葉と共にあの山へ行った夜のこと、

そして、教授の家の庭で見た、あの奇怪な化け物の姿だった。

どうしてこんなことを考えているのか、自分でも分からない。第一、この二つには何の関係もない。一方は引越し直後の自分のイライラから来る八つ当たり、もう一方に至っては、ただの幻覚だ。繋がりはどこにもない。

けれど、伊吹は心のどこかでどうしてもこの二つに因果を見出してしまっていた。自分でもどうかしていると思う。きっと刑事の言うとおり、想

像以上に今日の出来事が堪えて、疲れているのだろう。非論理的な思考に囚われてしまっていた。

四月、伊吹は確かにあの社の扉を開け、中を覗き込んだ。そして最初に見たとき、あそこには確かに、奇妙な腕があった。何度もごまかそうとしてきたけれど、もう無理だ。開いたときには、確実に腕が存在していたのだ。黒く太く、明らかに人のものではない左腕が入っていた。それから一度明かりが消え、再度点いたときには――すでにその腕は、なくなっていた。

いや、ひよつとしたら、からくり細工のような仕掛けが施されていたのだろうか。例えば、一度扉を開けると奥から風が吹いて蠟燭を消し、また火を点けたときには床面が反転して腕がなくなっている、というような。ありそうな話ではある。

でも、江戸時代だかいつだかは知らないが、そんな精緻な仕掛け物をあんなところに用意して、一体何の意味があるというのだろう。イタズラとというのは、人間がいる場所でするものだ。江戸の神社あたりならともかく、こんな山奥に設置したところで驚く者はいないのだから。あれはそんな、簡単なものではない。

伊吹は腕組みをする。

——だとしたら、何だというのだ？

尾津野家の先祖が封じた平安時代の鬼を、

あの時、伊吹が社を開けて解放してしまい、

鬼の腕は社から消え、

そして外の世界に再び、鬼が現れるようになった？

「……馬鹿馬鹿しい」

伊吹は一人、呟いた。

7.

その頃。

伊吹の乗る列車の行く手、線路の傍ら。
何かが、八本の毛むくじやらの足を地面にがつしりと噛ませ、待ちかまえている。

熊ほどの大きさのその何かは、身を震わせ、時折、きい、と哭ないている。
暗い山から、続いて数頭が下りてくる。

8.

結局そこなのだ。伊吹は思う。そこで自分は引つかかり、思考停止する。

鬼を封印するだとか、鬼が現れるだとか。

そういう物事が、信じられないのだ。

いや、信じられないのは当然にしても、心に受け入れることすら出来ない。鬼などというものは必要ない。不快だし、この世からなくすべきだ。

そんな、拒絶反応とでも言った方がいいような、強烈な拒否感が自分の胸の中にあつた。なぜなのか、自分でも不思議なほどだった。

宗教と対比すると分かりやすい。伊吹は特定の宗教を信じてはいなかったが、それでも、受け入れることは出来た。信じている人の存在ももちろん認められたし、アメリカにはいくらでもそんな人はいた。なぜなら、宗教は人を救い、和らげ、鎮めることが出来るからだ。争いの種になることはあるにしても、根本的には人間を助け、希望を与えるためのもの、世の中に必要なものだ。

——でも。

鬼は、そんなものじゃない。

仮に鬼の存在を信じたとして、誰が救われるというのだろうか。鬼は暴力的で、非理性的で、人間を助けることなどあり得ない。恐怖、不安、異常、絶望、そうしたものを司り、形にしたのが鬼なのかも知れない。伊吹にはそう感じられる。

だとしたら、そんなものが存在する、と仮定したところで、何の意味もないではないか。人を怯えさせ、混乱に陥れる。寺の人々や、吉野などは、そんなものを信じているのだ。理解できない。伊吹には、到底受け入れられることではない。不愉快だった。

電車が揺れる一定のリズムが、伊吹の心を捉える。
真っ黒な窓に映る自分の暗い表情を、目の当たりにする。

——いや。

そういう問題じゃない。

自分はそのような、理屈で鬼を嫌悪しているのではないのだ。

伊吹はその時ふいに、そう気づいた。

理由だとか論理だとか。

そんなものは、どうでもいい。

とにかく自分は、鬼が厭なのだ。

夜の電車の中で、伊吹はようやく思い至った。

——自分は、鬼が、嫌いだ。

9.

ぞろぞろと下りてきたその何かの群は、揺れる線路の向こう側を三つの
眼で見やる。

口を音を立てて動かしながら、列車が来るのを待っている。

空には月すらなく、辺りに光は何もなかった。

しかし向こうから、電車の灯りが近づいてくる。

何かは、ばきばきと首を鳴らした。

10.

——そうだ。自分は、鬼というものが嫌いなんだ。

伊吹はやっとそう思えた。今までその程度の単純なことも、自覚して
いなかった。理屈など関係ない。自分は心の奥深くで、鬼が厭で厭で仕方な
いのだ。

四月に紅葉や他の人の話を聞いて異様に苛立ったのも、単なる引越す直後の疲れとホームシックから来るヒステリーなどでは、恐らくない。あの時であったとしても、河童だとか天狗だとか、別の化け物や妖怪の名前を挙げられていたら、鼻で笑って済ませられたと思う。問題は非現実的かどうか、ではないのだ。

鬼の話をされたから、おかしなほどに腹が立って、あんな暴挙に出してまったのだ。

伊吹は、眉を顰めた。

分からなかった。なぜなのかまるで分からない。自分の心が奥深くでどうして鬼を拒絶しているのか、全く理解できなかった。そもそも、鬼などというものと関わり合ったのは生まれてこの方、ここへ越してきて以来だし、それ以前は、絵本や童話集などで読んだ程度だろう。けれど、伊吹は鬼という概念、存在、考え方、イメージ、全てに強い嫌悪感を抱いていた。

——なぜだ？

どれだけ考えても、伊吹には分からなかった。こんなことは初めてだった。自分の中に、こんな訳の分からない奇妙な感情を発見するなんて。普段の伊吹は、自分のどんな行動にもきちんとした理由を持っているのだ。それなのに。気持ちが悪かった。

何とか筋道を立てて考えて、この異物を取り除いてしまいたかった。でも、考えても考えても、理由など思い当たらない。理由など不要だと思えるほどに、伊吹としては、当然の感情だったのだ。

鬼について頭を巡らせると、途端に胸の内に不快感が芽生える。ぞわぞわとした感覚が湧き上がってくる。腹が立ち、苛立ち、全てを否定したくなる。

ただただ、厭だった。

次第に気持ち悪くなってきた、伊吹は吐き気を覚えた。

その時——。

ふいにどこからか、ドン、という、重く強い衝撃が走った。

列車が急ブレーキを掛けた。